慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	蔵書評価法からみた図書館員と教員の選書 : 慶應義塾大学三田メディアセンターの事例分析
Sub Title	Book selection by librarians and faculty through collection evaluation methods : a case study of Keio University Library in Japan
Author	小泉, 公乃(Koizumi, Masanori)
Publisher	三田図書館・情報学会
Publication year	2010
Jtitle	Library and information science No.63 (2010.) ,p.41- 59
JaLC DOI	
Abstract	【目的】本研究の目的は, 第一に, これまで定性的に述べられてきた大学図書館における図書館員と教員の選書が, 利用者の貸出や蔵書構築にどのような影響を与えているのかを定量的に明らかにすることである。第二は, 蔵書の状況や利用者の貸出の状況を定量的に分析することで, 図書館員と教員の選書の特徴を明らかにすることである。第三は, 複数の蔵書評価法を選書研究に適用することで, その有効性を探ることである。 【方法】定量的な蔵書評価法である利用統計分析法とチェックリスト法を採用し, 慶應義塾大学三田メディアセンターの経済学分野の図書を対象に, 図書館員と教員の選書を比較した。利用統計分析法では, 1) 蔵書受入冊数, 2) 蔵書回転率, 3) 非貸出図書の所蔵率, 4) 年5回以上貸出のある図書の割合, 5) 利用者別の貸出率, 6) 利用者別の蔵書回転率, 7) オブソレッセンスという七つの観点から分析を行なった。また, チェックリスト法では, 1) 他大学図書館の目録, 2) 経済学分野で書評された図書, 3) 『選定図書総目録』, 4) 修士・博士論文の引用文献という四つの観点からチェックリストを作成し, 分析を行なった。 【結果】図書館員と教員の選書には, 明らかな特徴の違いがあった。利用統計分析法から, 図書館員は和図書を多く選書し, 教員は図書館員に比べると洋図書を多く選書していた。図書館員が選書した和図書は多く貸し出され, 教員が選書した図書はその多くが貸し出されていなかった。図書館員が選書した図書は, 利用者の種類を問わず, 繰り返し貸し出されていた。また, 図書館員が選書した図書は, 長期にわたり貸し出される傾向にあった。チェックリスト法からは, 図書館員の選書は教員に比べて, チェックリストとの重複率が格段に高いことがわかった。複数の蔵書評価法を適用することで, 選書者の特徴を実証的に提示できたことから, 蔵書評価法は選書研究に有効な手法であることが明らかになった。
Notes	原著論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00003152-00000063-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Library and Information Science No. 63 2010, p. 41–59.

原著論文

蔵書評価法からみた図書館員と教員の選書：慶應義塾大学三田メディアセンターの事例分析

Book Selection by Librarians and Faculty Through Collection Evaluation Methods: A Case Study of Keio University Library in Japan

小 泉 公 乃
Masanori KOIZUMI

Résumé

Purpose: This paper illustrates quantitatively the different methods of selecting books and the results between librarians and faculty of universities. The three main research issues are: 1) the impact of book selection on the level of book circulation and the quality of the library collection, 2) the characteristics of book selections, and 3) the possibility of applying collection evaluation methods to research issues in studies on book selection.

Methods: The quality and characteristics of economic books held in Keio University Library were quantitatively measured by two collection evaluation methods based on book circulation statistics and list-checking, and the differences between books selected by librarians and faculty were analyzed. Book circulation statistics were examined from seven perspectives: 1) total number of Japanese and foreign language books, 2) collection turnover rate, 3) percentage of non-loaned books, 4) percentage of books loaned more than five times per year, 5) percentage of loaned books by user type, 6) collection turnover rate by user type, and 7) obsolescence. For list-checking, this study used four check-lists: 1) other library catalogs, 2) economics book reviews, 3) selective bibliography (Senteitosho-Soumokuroku) and 4) books cited in masters' and doctoral theses.

Results: According to book circulation statistics, librarians tend to select more Japanese books than those written in foreign languages, and conversely, faculty prefer to select foreign language books. Most of the Japanese books selected by librarians were loaned, but most of the books selected by faculty were not loaned. Books selected by librarians were frequently loaned by every user, and became obsolete more slowly that those selected by faculty. List-checking showed that books selected by librarians largely overlapped the check-lists. As these results show, the collection evaluation method is a useful tool for book selection studies.

小泉公乃：慶應義塾大学大学院文学研究科，108–8345 東京都港区三田 2–15–45
Masanori KOIZUMI: Graduate School of Library and Information Science, Keio University, 2–15–45, Mita, Minato-ku, Tokyo 108–8345, Japan
e-mail: koizumi@slis.keio.ac.jp
受付日：2009 年 7 月 21 日 改訂稿受付日：2009 年 10 月 10 日 受理日：2010 年 1 月 13 日

I. 背景と目的
A. 選書に関する先行研究
B. 大学図書館における選書者の種類
C. 研究目的
II. 調査方法
A. 調査の対象
B. 蔵書評価の方法
III. 調査結果
A. 利用統計分析法
B. チェックリスト法
IV. 考察と結論
A. 図書館員と教員の選書の比較
B. 図書館員の選書の特徴
C. 教員の選書の特徴
D. 選書の分析に用いる蔵書評価法の有効性
E. 今後の課題

I. 背景と目的

A. 選書に関する先行研究

蔵書は，図書館における第一の経営資源であり[1]，図書館が提供するあらゆるサービスの中核[2]である。その蔵書を構築するための業務は，主に三つからなる。第一は，図書館が所属するコミュニティの特徴や利用者を分析し，蔵書の形成方針や選書方針を策定するという「計画」である。第二は，図書館に所蔵すべき資料を選書・収集したり，不要である資料を破棄したりする「実行・実務」である。第三は，蔵書の「評価」である。しかし，これらの業務が必ずしもすべての図書館で行なわれているわけではない。三浦は，かなりの時間と労力を要する「計画」や「評価」を実施している図書館は多くなく，「実行・実務」に関しても，実際にどの図書館でも常に繰り返される蔵書構築の業務は，選択（選書）と収集の二つだけである[2]，としている。ここから，蔵書を構築するための業務の中でも，図書館の第一の経営資源となる蔵書を選択する「選書」とそれに付随する「収集」という業務は，極めて日常的なものであり，図書館経営において欠くことのできない重要な役割を果たしていることがわかる。

「選書」とは，図書館が所蔵すべき資料をある価値観に基づいて選択する行為である。資料には，図書や雑誌といった印刷媒体からCD-ROM，DVD，電子ブックといった電子媒体など，知識や情報を運ぶあらゆる媒体が含まれる。選書は，「図書選択」と呼ばれたり，選択する対象物の範囲を拡大して「資料選択」と呼ばれたりする[3]が，過去の文献では，「選書」という言葉とともに「図書選択」が用いられることが多い。これは，三浦が指摘するように，図書館は，図書や雑誌といった印刷媒体が蔵書の中核[2]であり，日々の業務で図書館員が頻繁に選書を迫られる対象物は，主に図書であることが理由であると考えられる。

このような選書に関する議論には，主に，(1) 選書方針，(2) 図書選択論，(3) 選書ツール，(4) 選書者がある。現代においても選書に関する議論は継続的になされているが，それらの議論の多くは，「図書選択論」を中心に発展してきた。Carnovsky[4),5)]によれば，1930年代後半から1940年代までの図書選択論は，「価値論（value theory）」と「要求論（demand theory）」に集約される。価値論は，図書の価値を評価することで図書を選択しようとする理論であり，要求論は，利

用者の要求やニーズに適合する図書を選択しようとする理論である。現代においても，河井[6]，三浦・根本[2]，Evans[7] らが，過去の図書選択論を「価値論」と「要求論」に集約しており，価値論と要求論という考え方が選書の共通認識となっていることがわかる。

その一方で，選書方針，選書ツール，選書者など，選書に関するその他の議論は，図書選択論に比べると少ない。これらの中で，特に重要とされるのが選書者である[8]。このことは，Evans[7] が蔵書構築プロセス（collection development process）の中心に図書館員を据えていることからもわかる。選書者は，選択すべき図書の概要を記述した選書方針や，出版者などが発行する図書のリストや書評といった選書ツールを参照するが，どの図書を選書するかの最終的な判断の多くは，各選書者の価値観に委ねられる。これが，選書者が重要とされる理由であり，Broadus の“図書館員は選書をする際に，選択の判断をそれぞれの人格・性格（personalities）に少なからず依存することは避けられない”[9] や，三浦の“選択者の主観的判断に依存するところが大きくなるのは避けられない”[2] という記述からも明らかなことである。

このように，選書方針や選書ツールを採用しつつも，選書が各選書者の価値観に委ねられることで生じる課題は，主に大学図書館を対象に指摘されてきた。これは，公共図書館では，19 世紀後半から図書館員による選書が確立されていた一方で，大学図書館では，教員や図書館員といった複数の立場の選書者が存在している[10] からであると考えられる。たとえば，日本では，大学図書館の 6 〜 7 割では教員によってのみ選書が行なわれており，残る 3 〜 4 割の大学図書館でも，図書館員が選書に参加するものの予算は少なく，補完的な選書にとどまる傾向にある[3,8]。このような状況を背景に，過去における教員を中心とする選書を対象に，“蔵書構成に無秩序さや偏りが認められることは，利用者によってつとに指摘されてきた”[8]，あるいは，“個人的な事情による恣意的な選択になることが往々にしてみられる”[2]，といった定性的な指摘がなされている。しかし，選書者を対象とした実証的な研究の数は少ない。これは，選書を実証的に分析することができる目録データや貸出統計データの分析に膨大な時間を要したこと[2] や図書館員の関心が選書に関する議論の中でも，価値論や要求論といった図書選択論に向いていたこと[6] が理由であると考えられる。

また，三浦が，個々の選書者による図書選択の意思決定をミクロ意思決定と位置づけ，

> ミクロ意思決定は一つ一つの資料をコレクションに加えるか，加えないかの意思決定であり，それは資料の内容と利用者のニーズ，および両者の関係において生じる価値に関わるものであり，究極的には個人の認知的なプロセスである。このプロセスの精密な観察はむずかしく，しかもその全体を的確に表現することもほとんど不可能といってよい。[2]

と指摘している。つまり，選書者の図書の選択について実証的に明らかにすることは，非常に難しい状況にあり，このことが，選書者を対象とした実証的研究が少ない理由の一つになっている。

そのような中，選書者を対象とした実証的な研究が，Evans（1970）[11] と Pritchard（1980）[12] によって実施されている。Evans は，見計らいによる一括発注（blanket-order approval plans）への傾倒に対する危機感から，図書館員，教員，書籍取次店（book jobbers）という選書者の立場や価値観の違いが，選書した図書の貸出に与える影響を実証的に明らかにした。Evans は，四つの学術図書館を対象に，各選書者が選択した図書を約 2,000 件ずつ無作為抽出し，その貸出回数・有無を分析した。その結果，図書館員が選書した図書は，教員や見計らいによる一括発注に比べ，より多く貸し出されていることがわかった。

Pritchard は貸出統計データを利用することで，選書者による選書の特徴の違いを実証的に明らかにした。分析対象は，1975 年に受入をした専門書を四つのグループに分け，各グループで 7 冊ずつ抽出した合計 28 冊の図書であった。四つのグループとは，（1）相互貸借（ILL）のデータを

参考に購入した図書，（2）教員が選書した図書，（3）図書館員が選書した図書，（4）すでに図書館が保有している図書の改訂版（new editions），である。分析対象とした図書の出版年は1971年から1975年であった。Pritchardはこれらの図書を対象に，1975年から1977年までの3年間の貸出統計データを分析した。その結果の一つとして，図書館員と教員が選書した図書を比較し，図書館員が選書した図書のほうが，教員が選書した図書よりも貸出回数が多いことを明らかにした。

これらの研究は，選書の結果である蔵書に着目し，その蔵書を評価することで，実証的に選書者の特徴を明らかにすることに成功している。ただし，いずれの研究も1960年代や1970年代のものであり，分析対象とした図書の件数も少なく，貸出回数・有無のみで選書者を比較している点でさらなる研究の余地がある。また，選書者を対象とした実証的な研究は，日本において行なわれていない。

B. 大学図書館における選書者の種類

大学図書館の選書者の組合せには，古くから，（1）図書館員のみ，（2）図書館員と教員，（3）教員のみ，という三つの種類があるとされている[5]。また，日本の大学図書館における選書を対象とした調査においても，同じ三つの組合せから選書者が構成されていることが明らかになっている[13]。ここから，大学図書館の選書は大きく二つの存在によってなされていることがわかる。一つは図書館員であり，もう一つは教員である。他の存在として利用者も無視はできないが，利用者については，利用者の声や利用者の要求を反映した相互貸借の情報などをもとに，実際には図書館員が図書を選書しているため，大きくは図書館員による選書に含まれるといえる。図書の購入に関する決定権を保有しているのは，一般的に図書館員と教員であるということからも，選書に関する決定権の大小の差こそあれ，大学図書館における選書には，図書館員と教員が大きな役割を担っていることがわかる。

これらのことから，大学図書館における選書者の特徴を明らかにしようとすれば，その焦点は自ずと図書館員と教員の選書に向かう。

C. 研究目的

以上のことから，本研究の目的は，第一に，これまで定性的に述べられてきた大学図書館における図書館員と教員の選書が，利用者の貸出ひいては蔵書構築にどのような影響を与えているのかを定量的に明らかにすることである。第二は，蔵書の状況や利用者の貸出の状況を定量的に分析することで，図書館員と教員の選書の特徴を明らかにすることである。第三は，複数の蔵書評価法を選書研究に適用することで，その有効性を探ることである。

II. 調 査 方 法

A. 調査の対象

本研究の調査対象は，慶應義塾大学三田メディアセンターの図書館員と慶應義塾大学の教員の選書である。慶應義塾大学では，各キャンパスにメディアセンターが設置され，それぞれが連携をしつつ，独自の方針で運営されている。

本研究が調査対象とした慶應義塾大学三田メディアセンターの平成20年度の図書予算は，約6億6,897万円であった。そのうち，図書館員が選書に関し執行責任を保有する図書予算は3億4,450万円（図書館図書予算）で，全体の51.5％である。また，教員が選書を行なう図書予算は3億2,447万円（学部図書予算）で全体の48.5％から構成されていた[14]。

慶應義塾大学三田メディアセンターには，1982年から選書を行なう部署が設けられており[15]，専任の図書館員によって選書がなされている。高額な資料やマイクロ資料は，購入を検討するための委員会が年に4回ほど設けられているが，それらを除けば，図書館員が選書と購入を行なっている[16]。慶應義塾大学三田メディアセンターでは，選書者の判断を支えるために，シラバスを基礎として，選択すべき図書の方針について主題別・資料別での選書基準が作成されている[17]。この選書基準は，（1）学問の領域，（2）選書方針，

(3) 特記事項から構成され，選書方針は，学問の領域別に選択すべき図書の概要が記述されている[17]。選書方針は選書手順とは異なり，個人の判断が許容される範囲が多く残される[1]。慶應義塾大学図書館三田メディアセンターの選書基準には，選書手順が含まれていないことから，これまで定性的な観点から報告された他の大学図書館と同様に，選書者の価値観が図書の選択に反映される特徴がある。したがって，慶應義塾大学三田メディアセンターの図書館員は，選書方針を基礎に自らの経験や価値観に基づき，「ウィークリー出版情報」や「これから出る本」といったさまざまな選書ツールを用いて選書を行なうことになる[16),17)]。

一方，教員の選書については，各学部に図書委員会が設置され[15)]，図書委員会では，予算申請や学部内の分野ごとの予算配分と高額資料や継続して購入する雑誌の選定を行なっている[18)]。それ以外の一般的な図書については，見計らいや書店が持ち込んだ目録などを参考に，教員が自らの価値基準によって選書している[16)]。

これらの公開資料から，慶應義塾大学の三田キャンパスでは，図書館員と教員の図書予算がおよそ半分ずつであり，それぞれの価値観に基づいて選書を行なっていることがわかる。つまり，慶應義塾大学三田メディアセンターの蔵書は，図書館員と教員によって構築されているといえる。

B.　蔵書評価の方法

本研究では，慶應義塾大学三田メディアセンターを事例として，先行研究と同様に選書者が選択した図書を分析し，図書館員と教員の選書の特徴を明らかにする。その際，定量的に分析し，かつ評価の視点に偏りが生じないように蔵書評価法を用いた。ただし，蔵書評価法には，大きくは「蔵書の視点から蔵書を評価する方法」と「利用者の視点から蔵書を評価する方法」があり[1)]，それぞれにおいて，さらにいくつかの蔵書評価法が存在する。ここでの研究目的や分析対象を考慮すれば，本研究で用いる蔵書評価法に求められる機能は，(1) 定量的な分析ができること，(2) 数多くの蔵書を網羅的に分析ができること，(3) 評価の視点に偏りがなく客観的な立場から分析ができることの3点である。そこで，本研究ではこれらの3点を念頭に置き，主要な蔵書評価法の特徴をCarnovskyの蔵書評価における「信頼性(reliability)」と「実用性（availability)」の概念から整理した。信頼性については，本研究に求められる機能から蔵書評価法を整理し，実用性では，それぞれの蔵書評価法の実行可能性を整理した。

Carnovskyの「信頼性」と「実用性」の概念は，河井によって丁寧にまとめられ，日本において紹介されている[19)]。「信頼性」とは，その蔵書評価法に基づいて分析をした際に，得られた結果がどれほど信頼できるものかを表す。たとえば，蔵書の評価が網羅的かつ客観的（定量的）か，あるいは，蔵書を評価する視点に偏りがないか，といったことが問題になる。一方,「実用性」とは，その蔵書評価法を用いて蔵書の評価を行なう際に発生する作業量が，現実的であるかどうかを表す。たとえば，蔵書評価を行なう際に要する時間やコストが現実的か，あるいは外部の業者に依頼せずに図書館員の手によって評価をすることができるか，といったことが問題になる。つまり，ある蔵書評価法を用いて蔵書に関するデータを分析し，得られた結果の信頼性が高かったとしても，それに見合うだけの実用性がなければ，実際に活用することはできない。また，実用性が高くても，信頼性が低ければ，蔵書評価を行なう意味がなくなる。

本研究では，研究目的とCarnovskyの蔵書評価における概念から,「信頼性」の指標として,「網羅性」「客観性」「評価視点の多様性」の三つの指標を設定した。「網羅性」は，蔵書評価を行なう際に一度に評価できる蔵書範囲の広さのことである。「客観性」は，蔵書評価の際にどれだけ客観的に評価できるかの度合いを意味し，主に定量的で，評価者の主観が入りにくいか否かで判断をする。「評価視点の多様性」は，蔵書評価の際に，一つの観点に偏ることなく，さまざまな観点からの評価を可能とする度合いのことである。一方,「実用性」の指標としては,「時間」「コスト」「内

部対応度」の三つを設定した。「時間」とは，蔵書評価を実施する際に要する時間であり，「コスト」は，蔵書評価を実施する際に要する経費である。「内部対応度」は，蔵書評価の際に外部の業者に依存せずに，図書館員自らが評価をすることができる度合いを意味する。本研究の目的や分析対象との適合性は，「信頼性」の指標によって測られるが，研究を行なうにあたっての実行可能性は，「実用性」の指標によって測ることになる。この六つの指標を用いて，蔵書評価法に対する評価を整理したものが，第1表である。なお，第1表では，各指標間の関係性や重要度についての検討は行なっていない。

蔵書中心評価法における「チェックリスト法」は，実用性も信頼性も高い蔵書評価法であるといえる。過去においても，Carnovsky（1960）[20]，二階（1982）[21]，Lotlikar（1992）[22]，粕谷（1999）[23]，川村（2000）[24]，柴田（2001）[25]，気谷（2002）[26]，Leiding（2005）[27] など，日米問わず現代に至るまで，数多くの研究においてチェックリスト法が採用されている。また，河井も，“精密に蔵書の評価を行なうときは必ずこの方法が用いられている”[3] と述べている。

「蔵書分析ソフトウェア」としては，OCLC によるソフトウェア（LACEY iCAS SOFTWARE）などがよく知られている。OCLC の蔵書分析ソフトウェアは，主題別に網羅的に蔵書を評価するものである。OCLC の蔵書分析ソフトウェアを用いた蔵書評価の状況については，Perrault（1999）[28] が詳しい。また，類似したサービスとして，1970年代後半から90年代にかけて開発された RLG や現在も開発され続けている WLN によるコンスペクタスがある[29]。コンスペクタスは，分野別に蔵書規模のランクにわけて，自館の蔵書を網羅的に評価する方法である。両者とも，一時期に広まったが，時間や費用がかかるなどの批判があ

第1表　蔵書評価法の信頼性と実用性

		信頼性			実用性		
		客観性	評価視点の多様性	網羅性	時　間	コスト	内部対応度
蔵書中心評価法	①チェックリスト法	△	○	△	△	○	○
	②蔵書分析ソフトウェア	○	×	○	×	×	×
	③専門家(1名)による調査	×	×	×	△	△	×
利用者中心評価法	④利用統計分析法	○	×	○	○	○	○
	⑤聞き取り調査	△	×	×	×	△	△
	⑥利用可能性調査	○	×	×	×	△	△

評価基準

○	定量的	視点が五つ以上	一度に数万の蔵書を評価できる	1～3日程度	一般的に，追加費用なし	図書館員のみで実施
△	定量的であるが，部分的に定性的な要素が入る	視点が二から四つ	一度に数千の蔵書を評価できる	1週間程度	一般的に，十数万円程度の費用がかかる	図書館員も実施できるが，一般に外部の業者が行なうことが多い
×	定性的	視点が一つ	一度に数百の蔵書を評価できる	1週間以上，場合によって数カ月	一般的に，十数万円以上の費用がかかる	外部の機関・人が実施
備　考	—	視点とは，評価者の視点を指す	—	準備期間も含む	—	—

り，近年では，オーストラリア国立図書館を中心に行なわれたもの（1988 〜）[30]，チェコ国立図書館（2003）[31]，ペンシルベニア州立図書館（1990）[32] など，予算が潤沢な国立図書館や大規模な図書館を対象とした評価で利用されている程度である。このように，OCLC の蔵書分析ソフトウェアやコンスペクタスには，時間や費用の問題から評価の継続性などに課題がある。また，図書館員が独自で蔵書の評価を行なおうとしても，膨大な作業量が必要となり，現実的にできないという欠点がある。

「専門家による調査」は，一人の専門家が図書館のある特定の専門分野の蔵書を対象に，実際にブラウジングをすることで評価を行なう。この調査法は，ある一人の専門家の主観に依存することから，客観性が低く，また一度に評価できる蔵書の範囲も狭くなってしまう。日本においては，チェックリスト法とともに二階（1982）[21] によって実施されているのみで，いずれも専門家による調査の欠点は解決されていない。

利用者中心評価法では，「利用統計分析法」が，実用性も信頼性も高い蔵書評価法であるといえる。利用統計分析法は，目録データや貸出データなどの統計データに基づいて，蔵書を評価する方法である。日本においては，岸田ら（1994）[33]，前野（1999）[34]，山田（2003）[35] など，数多くの研究者や図書館員によって適用されている。また，海外においても，実績がある蔵書評価法である。

「聞き取り調査」は，図書館利用者にインタビューやアンケートを行なうことで，蔵書を評価する手法である。この手法では，対象者数を多くすることでデータの信頼性を高めることができるが，対象者数の増加とともに，時間とコストも大幅に増え，図書館員のみで調査することが難しくなる。また，時間とコストを費やしても，利用者は蔵書についてよく知らない場合が多く，信頼性の高いデータを得ることが難しい [2] という指摘もある。近年，聞き取り調査は，Maughan（1999）[36] などによって行なわれているが，利用統計分析法と比べるとその数は少ない。

「利用可能性調査」は，利用者が欲する資料を図書館で入手するまでに，その図書館が資料を所蔵しているか，正しく目録が作成されているか，書架上に正しく配置されているかといったいくつかの関門があることに着目し，それぞれの段階を無事に通過する確率をデータから計算する方法である [1]。アメリカでよく利用されているが，大規模なデータを取得するため調査に時間を要し，図書館員のみで行なうことが難しい。そのうえ，正確にデータを取得することが難しいという問題を抱えている [1]。また，この蔵書評価法は，日本においてほとんど行なわれていない。

本研究の目的は，これまで定性的な観点から指摘されてきた選書者の特徴を評価の視点にできるだけ偏りなく定量的に分析することである。また，分析対象は，蔵書規模が大きい慶應義塾大学三田メディアセンターである。本研究の目的と分析対象を念頭に置きつつ第 1 表を参照すると，「客観性」と「網羅性」の評価が高い蔵書評価法として，「利用統計分析法」と「蔵書分析ソフトウェア」を挙げることができる。ただし，蔵書分析ソフトウェアは，実用性において課題を抱えているために，本研究では「利用統計分析法」を採用した。

また，利用統計分析法は，利用者からの視点という単一の視点からの蔵書評価法であり，評価の視点に偏りが生じてしまう。そこで，評価の視点の偏りを補うために，「評価視点の多様性」で評価の高い「チェックリスト法」を併用することとした。

このように，「利用統計分析法」と「チェックリスト法」を組み合わせることで，本研究の蔵書評価に求められる，(1) 定量的な分析ができること，(2) 数多くの蔵書を網羅的に分析ができること，(3) 評価の視点に偏りがなく客観的な立場から分析ができることの 3 点を満たすことが可能になる。

1.　利用統計分析法（利用者中心評価法）

本調査では，慶應義塾大学三田メディアセンターの協力を得て，経済分野の図書を対象とした。図書の言語の種別は，和図書と洋図書の二つ

第2表　分析対象とした目録のデータ

	図書館員の選書		教員の選書	
	（和書）	（洋書）	（和書）	（洋書）
請求記号	A@	B@	EC@A	EC@B
受入年	1998年～2007年			
分類番号	NDC33（経済：日本十進分類法の第7～9版）			

とした。

目録データの抽出方法は，日本十進分類法の第7～9版の経済（NDC33）に分類され，かつ受入年が1998年から2007年の図書館員が選書した図書と経済学部の教員が選書した図書である。図書館員が選書した図書と経済学部の教員が選書した図書の判別は，請求記号から行なった。慶應義塾大学三田メディアセンターにおける請求記号の規則では，図書館員が選書した和図書の請求記号はA@で始まり，洋図書の請求記号はB@で始まる。経済学部の教員が選書した図書はEC@で始まる。経済学部の教員が選書した和図書は請求記号にAが含まれ，洋図書についてはBが含まれる（第2表）。

目録データとしては，受入年が1998年から2007年までの合計28,004件を用いた。また，貸出データは，1999年から2007年までの317,203件である。貸出データに1998年分が含まれていないのは，慶應義塾大学三田メディアセンターの運用規則では，過去10年分のデータのみを保存することとなっており，データを取得した2008年の時点においては，1998年分はすでに削除されていたためである。また，本研究における貸出回数は，受け入れられた図書が同年に貸し出された回数とした。

利用統計分析法では，以上の目録データと貸出データを活用し，（1）蔵書受入冊数，（2）蔵書回転率，（3）非貸出図書の所蔵率，（4）年5回以上貸出のある図書の割合，（5）利用者別の貸出率，（6）利用者別の蔵書回転率，（7）オブソレッセンス（obsolescence）の七つの観点から分析を行なった。

a.　蔵書受入冊数

蔵書受入冊数は，図書館員と教員が選書した図書を受入年別に集計した値である。この指標を設けることで，図書館員と教員がどれほど図書を購入しているのか，また，それぞれが和図書と洋図書のどちらを購入する傾向にあるのかがわかる。つまり，図書館員と教員の選書における関心が，和図書と洋図書のどちらに向けられているのかをそれぞれの受入冊数を比較することにより明らかにできる。

b.　蔵書回転率

蔵書回転率は，蔵書1冊当たりの貸出回数のことである。この指標は，図書館員と教員が選書した図書がどれだけ貸し出されているのかを示す。図書館員が選書をした図書と教員が選書をした図書の数が大きく異なるため，蔵書回転率を指標として用いることで，規模要因を除去することができる。つまり，貸出回数で比較をすると図書館員と教員が選書した図書の数の相違が結果に大きく影響してしまうが，蔵書回転率を用いれば，割合で比較をするために図書館員と教員の選書を比較することが可能になる。

蔵書回転率の計算式を示す。Aを「図書館員（または教員）が選書した図書の数」とし，Bを「貸出回数」とした場合，蔵書回転率は，

$$\text{蔵書回転率} = \frac{B}{\mathrm{A}}$$

として定義される。

c.　非貸出図書の所蔵率

非貸出図書とは，図書館で購入されたにもかかわらず，一度も貸し出されていない図書を意味する。そして，非貸出図書の所蔵率は，特定期間において貸出のない蔵書量を測定する指標である。この指標を用いることで，図書館員と教員が選書した図書のうち貸出のない図書の割合を示すことができる。具体的に，この指標は，図書館員（または教員）が選書した図書のうち1回以上貸し出された図書の数をCとして，

$$\text{非貸出図書の所蔵率} = \frac{(A-C)}{\mathrm{A}} \times 100 \quad (\%)$$

で定義される。本研究における貸出期間は，受け

入れられてから2007年末日までを設定している。

d.　年5回以上貸出のある図書の割合

選書した図書が数多く借りられたことは，その図書が「多くの利用者の情報要求に適合していること」を示していると判断し，本指標を設定した。先行研究の中には，年7回以上貸し出されている図書の割合を分析しているものもあった[3]が，本研究においては，慶應義塾大学三田メディアセンターの貸出回数の状況を考慮し，年5回以上貸し出されている図書の割合を指標として用いた。

e.　利用者別の貸出率

図書館員と教員が選書した図書が，誰にどれだけ利用されているのかをみるために，利用者別での貸出の割合を用いる。ここでは，利用者を5グループに分類した。具体的には，(1) 教員（教授，准教授，助教，専任講師，非常勤講師，訪問・招聘系教員，名誉教授，他教員），(2) 学部生（学部生，夏スクール学生，夜間スクール学生，通信スクール学生，他学生），(3) 大学院生（前期博士課程，後期博士課程），(4) 職員（慶應義塾職員，早稲田大学専任職員，他職員），(5) その他（塾員，塾外機関，日本学術振興会会員，他）である。

図書館員が選書した図書と教員が選書した図書において，利用者別の貸出率を比較することで，選書者による違いが，利用者の貸出にどのように影響しているのかを分析することができる。

f.　利用者別の蔵書回転率

利用者別の貸出率と併せて，利用者別の蔵書回転率を分析した。図書館員と教員が選書した図書別に，各利用者の蔵書回転率をみることで，どの利用者がどれだけ図書を借りているのかをみることができる。この指標から図書館員と教員の選書が，どの利用者によく借りられているのかがわかり，それぞれの選書の特徴を見いだすことができる。

g.　オブソレッセンス

図書の貸出回数を受入年別に集計することで，オブソレッセンスを分析できる。一般に，オブソレッセンスとは，文献の利用あるいは引用が経年的に減少していく現象を意味し，図書館において，文献の破棄や保存書庫への別置の根拠となるものである[37]。

本研究では，蔵書数が異なる図書館員と教員の選書を比較するために，貸出回数ではなく，蔵書回転率の経年変化からオブソレッセンスを明らかにした。また，出版年を基礎にオブソレッセンスを分析する場合もあるが，図書館では異なった出版年の図書を受け入れることもあるために，実態を反映した「受入年」で分析した。具体的には，1999年と2000年に受け入れられた図書を対象に，2007年までの8，9年間の蔵書回転率を算出した。蔵書回転率を単年で分析するのみならず，その経年変化を分析することで，図書館員と教員の選書の比較に長期的な観点を導入することになる。なお，期間については，東京大学総合図書館の調査[38]で，経済学分野の図書は購入後5年を過ぎるとほとんど貸し出されていないことが明らかになっている。このことから，本研究では，8，9年間という期間を設ければ，経済学分野の図書のオブソレッセンスを明らかにするのに十分であると判断した。

2.　チェックリスト法（蔵書中心評価法）

利用統計分析法における評価視点の多様性の低さを補うために，利用統計分析法とは異なった観点の蔵書評価法であるチェックリスト法を採用した。チェックリスト法では，評価者が実際に使用するチェックリストが，評価を実施する際の実用性と評価結果の信頼性に大きく影響を与える。特に，本研究では，チェックリストにおける評価結果の信頼性を高めるために，複数のチェックリストを用いることで，さまざまな視点を評価に導入した。具体的には，(1) 他の大学図書館の視点，(2) 図書選定事業者の視点，(3) 専門家の視点，(4) 利用者の視点である。

他の大学図書館の視点を示すチェックリストとして，複数の大学図書館の蔵書目録（OPAC）とNACSIS Webcatからチェックリストを作成した。図書選定事業者の視点では，日本図書館協会が出版している「選定図書総目録」からチェックリス

トを作成し，専門家の視点では，書評された図書のチェックリストを作成した。利用者の視点では，修士論文と博士論文の引用文献からチェックリストを作成した。ただし，利用統計分析法とは異なり，チェックリストを作成するために時間を多く要するため，一人の研究者が行なうには作業時間に限界があった。そこで，出版年と図書の種別を絞り込むことで対応した。具体的には，出版年が2004年と2005年の和図書を対象とし，2007年に調査を行なった。詳細については，チェックリストの作成方法とともに以下に示す。

a.　チェックリストの作成方法

1）　複数の大学図書館の蔵書目録（OPAC）とNACSIS Webcat

①複数の大学図書館の蔵書目録（OPAC）

チェックリストを作成する際に対象とした大学は，経済学分野において科学研究費補助金を多く取得している上位校[39]とした。具体的には，国公立大学からは，神戸大学，一橋大学，大阪大学，東京大学であり，私立大学からは，立命館大学，明治大学，中央大学の計7大学である。なお，早稲田大学も私立大学の上位に位置していたが，蔵書目録（OPAC）の制約上，データを効率的に取得できないことから対象から除外した。

蔵書目録から文献リストを抽出する方法は，図書の分類が「NDC33」，または件名に「経済」が含まれ，かつ出版年が2004年または2005年である和図書とした。これにより抽出された文献は，5,121件であった。

② NACSIS Webcat

NACSIS Webcatからは，件名に「経済」が含まれ，かつ出版年が2004年または2005年であるものを抽出した。目録データを抽出する際に「NDC33」を利用していないのは，NACSIS Webcatにおける仕様上の問題で，分類からの検索ができないためである。NACSIS Webcatから作成したチェックリストに含まれる文献は，599件であった。

2）　経済学分野で書評された図書

書評の収集には，国立国会図書館の雑誌記事索引を利用した。具体的には，経済学分野で出版されている雑誌記事で書評された図書を雑誌記事索引から抽出した。抽出方法は，国立国会図書館分類表の逐次刊行物の経済分野（国立国会図書館の分類記号：ZD＊），かつ書評（雑誌記事索引における記事の種別：7），かつ出版年が2004年または2005年であるものを抜き出した。国立国会図書館の雑誌記事索引から抽出することのできた経済分野の和図書の件数は，872件である。

3）『選定図書総目録』における大学生向け図書

図書選定事業者の視点では，日本図書館協会が出版している『選定図書総目録』を利用した。具体的には，『選定図書総目録』から，経済分野（NDC33）に分類され，かつ大学生向けとされている図書を抽出した。出版年は，2004年と2005年を対象とした。『選定図書総目録』から作成したチェックリストに含まれる文献は215件であった。

4）　修士・博士論文の引用文献

利用者の視点として，修士論文と博士論文の引用文献リストを作成した。利用した論文は，慶應義塾大学大学院経済学研究科の修士論文と博士論文，一橋大学大学院経済学研究科と東京大学大学院経済学研究科の博士論文であり，それらの引用文献をチェックリストに含めた。慶應義塾大学については，三田メディアセンターの主たる利用者であるために採用した。また，一橋大学と東京大学については，経済学分野における科学研究費補助金取得の上位大学であるために採用した。これらの研究科の修士論文と博士論文（合計103件）の引用文献から和図書を抽出し，チェックリストを作成した。出版年については，2004年と2005年を対象とした。作成したチェックリストに含まれる文献は，104件である。

以上の1)から4)の和図書のチェックリストの重複を省いた5,979件をチェックリストとして本研究で用いた。

b.　チェックリストを用いた調査方法

さまざまな資料から作成したチェックリストを基礎に，慶應義塾大学三田メディアセンターにおける所蔵の有無を確認した。所蔵されていた和図書については請求記号を確認し，それが図書館員

の選書か，教員の選書かの確認を行なった。

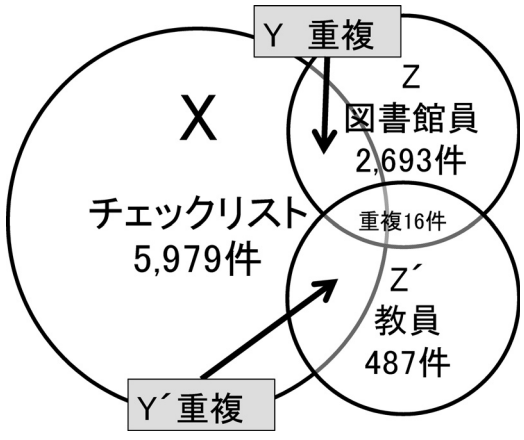
c.　チェックリストを用いた評価

本研究おけるチェックリスト法では，第1図で示すXを「チェックリストに含まれる図書」，*Y*を「チェックリストに含まれ，かつ選書された図書」，Zを「選書された図書」とした。図書館員と教員の選書した図書は類似した概念であるため，図書館員は（*Y*, Z）とし，教員は（*Y*′, Z′）とした。その位置づけを第1図に示す。以下の定義においては，図書館員の選書を例として用いる。

通常，チェックリストを蔵書評価に用いる際には，所蔵率として，

$$\text{所蔵率} = \frac{Y}{X} \times 100 \quad (\%)$$

で定義される指標を用いる。



第1図　チェックリストと選書された図書の重なり

しかし，ZとZ′の蔵書数が大幅に異なること，さらに選書を評価するためには，「選書した図書が，チェックリストにどれだけ含まれているか」ということについて評価する必要があることを考慮し，本研究においては，

$$\text{チェックリストとの重複率} = \frac{Y}{Z} \times 100 \quad (\%)$$

として，「チェックリストとの重複率」を定義した。このチェックリストとの重複率に基づき，図書館員と教員の選書を比較する（第1図）。

III.　調査結果

A.　利用統計分析法

1.　蔵書受入冊数の推移

受入年を基礎に，1999年から2007年までの受入冊数の推移を示す（第3表）。蔵書受入冊数の合計をみると，図書館員が選書した図書のうち和図書は11,515件，洋図書は2,901件となっており，図書館員は和図書を多く選書していた。教員が選書した図書に関しては，和図書が2,220件，洋図書が11,368件となっており，教員は洋図書を多く選書していた。

年による推移をみると，2004年以降，教員が選書した洋図書の受入数が減少した。その一方，2007年の図書館員が選書した和図書は1,120件であり，最も件数が多かった2003年に比べれば減少しているものの，1998年の559件に比べると大幅に増加した。教員の和図書についても，最も件数が多かった2001年を境界とし，減少傾向にあった。

第3表　蔵書受入数の推移（1998年～2007年）

選書者	図書種別	受入年 1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	合計
図書館員	（和図書）	559	912	1,239	952	1,316	1,434	1,432	1,261	1,290	1,120	11,515
	（洋図書）	308	332	282	325	215	355	221	229	342	292	2,901
教　員	（和図書）	140	272	325	330	233	235	253	234	128	70	2,220
	（洋図書）	1,233	1,133	1,349	1,281	1,229	1,418	1,217	944	919	645	11,368
合　計		2,240	2,649	3,195	2,888	2,993	3,442	3,123	2,668	2,679	2,127	28,004

2. 蔵書回転率の推移

図書館員が選書した図書の蔵書回転率は，1999年から2007年の通年において，和図書が2.39，洋図書は0.32であるのに対し，教員が選書した図書の蔵書回転率は，通年で和図書は0.35，洋図書で0.12となっていた（第4表）。ここから，図書館員が選書した図書のほうが，蔵書回転率が高いことがわかる。また，各年をみても，図書館員が選書した和図書の蔵書回転率は，他と比べて一貫して高かった。

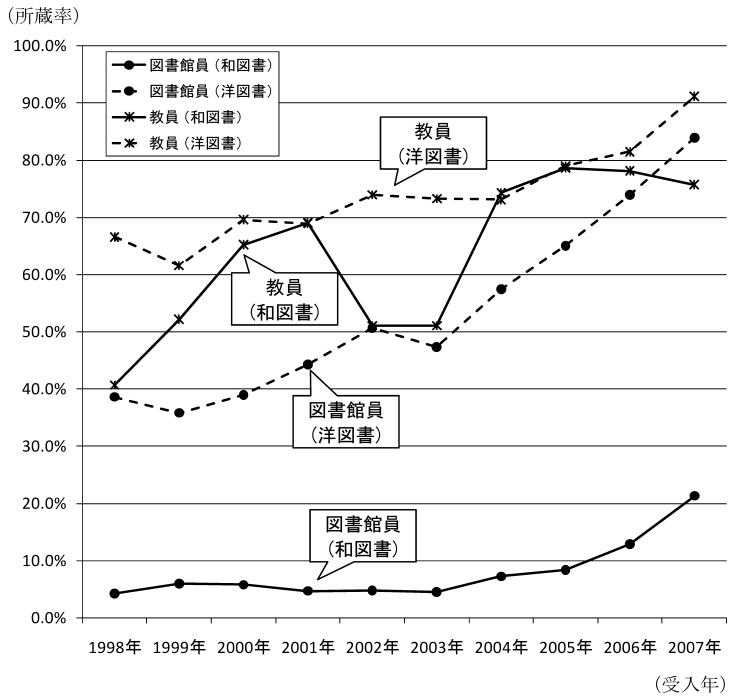
3. 非貸出図書の所蔵率

通年における図書館員の選書した図書の非貸出図書の所蔵率は，和図書は4.4％であり，洋図書は49.4％であった。それに対し，教員が選書した図書は和図書が60.2％であり，洋図書は70.9％であった。ここから，教員が選書した図書の大部分が貸し出されていないことがわかる（第2図）。

また，全体の傾向として，受入からの期間が短いほど非貸出図書の所蔵率が高いことは，長期間所蔵されていれば，貸し出される可能性が高まることを示している。

第4表　蔵書回転率の推移（1999年～2007年）

選書者	図書種別	受入年 1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	通年
図書館員	（和図書）	2.22	2.36	2.46	2.65	2.55	2.44	2.30	2.22	2.25	2.39
	（洋図書）	0.37	0.38	0.35	0.36	0.51	0.28	0.21	0.22	0.17	0.32
教　員	（和図書）	0.37	0.24	0.25	0.64	0.65	0.34	0.17	0.27	0.26	0.35
	（洋図書）	0.15	0.10	0.12	0.10	0.13	0.15	0.11	0.13	0.11	0.12
総　計		0.91	1.02	0.93	1.28	1.21	1.22	1.16	1.16	1.25	1.13



第2図　非貸出図書の所蔵率

第 5 表　年 5 回以上貸出のある図書の件数（割合：％）

選書者	図書種別	受入年／貸出年 1999 年	2000 年	2001 年	2002 年	2003 年	2004 年	2005 年	2006 年	2007 年	平均
図書館員	（和図書）	156（17.1）	220（17.8）	178（18.7）	290（22.0）	256（17.9）	264（18.4）	234（18.6）	223（17.3）	172（15.4）	221.4（19.2）
	（洋図書）	0（0.0）	2（0.7）	2（0.6）	1（0.5）	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	0.6（0.2）
教　員	（和図書）	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	1（0.4）	2（0.9）	0（0.0）	1（0.4）	0（0.0）	0（0.0）	0.4（0.2）
	（洋図書）	1（0.1）	0（0.0）	0（0.0）	1（0.1）	1（0.1）	0（0.0）	1（0.1）	1（0.1）	0（0.0）	0.6（0.0）
合　計		157	222	180	293	259	264	236	224	172	223.0

※貸出件数：受入年と同年に貸し出された図書の件数

4.　年 5 回以上貸出のある図書の件数（割合）

図書館員が選書した図書で，年 5 回以上貸し出された和図書の平均は 19.2％であり，洋図書は 0.2％であった。それに対し，教員が選書した図書については，和図書が 0.2％であり，洋図書は 0.0％であった。教員が選書した図書のうち年 5 回以上貸出のある図書は，ほとんど存在していないことがわかる（第 5 表）。

5.　利用者別の貸出数と割合

図書館員が選書した和図書は，学部生（80.8％）に多く貸し出されていた。その一方で，教員が選書した和図書は，図書館員が選書した図書と比較すると教員（52.0％）に貸し出されている割合が高かった。また，図書館員が選書した洋図書は，大学院生（55.2％）に貸し出されている割合が高く，教員が選書した洋図書は，教員（40.0％）と大学院生（38.7％）へ貸し出される割合が高かった（第 6 表）。

6.　利用者別の蔵書回転率

利用者別の蔵書回転率をみると，図書館員が選書した和図書の回転率が，教員以外の利用者において，教員が選書した和図書の回転率を上回っていた（第 3 図）。特に，学部生の蔵書回転率は 1.93 となっており，その利用の多さが際立っている。その一方で，図書館員が選書した洋図書については，大学院生の蔵書回転率が 0.18 と他よりも高かった（第 4 図）。図書館員が選書した洋図書は，他の利用者についても教員の選書した洋図書の蔵書回転率よりも高いか，同じ値を示していた。

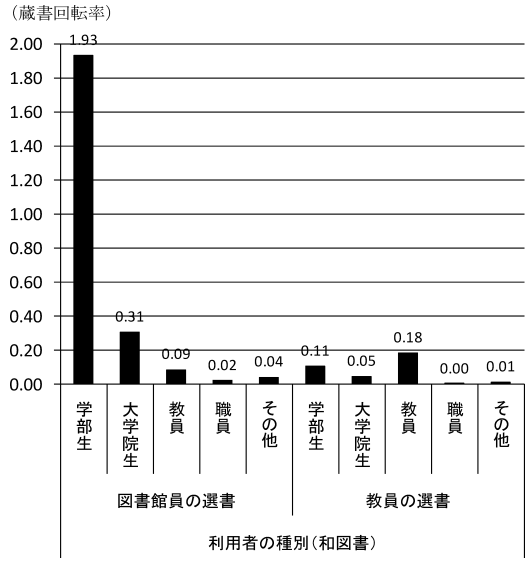
第 6 表　利用者別の貸出数の平均と割合

（％）

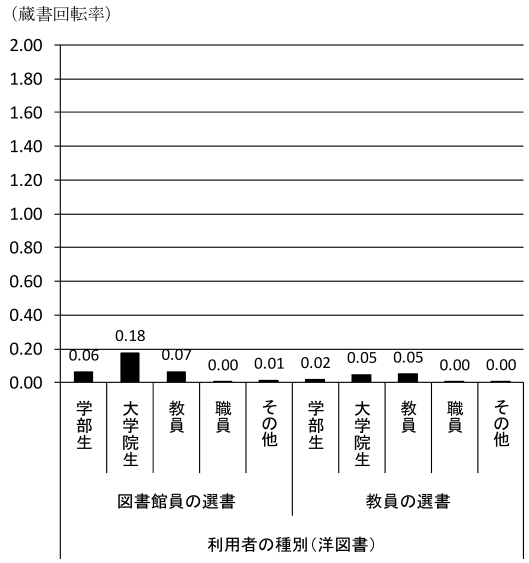
選書者	図書種別	利用者	平均（1999 ～ 2007 年）	
図書館員	（和図書）	学部生	2,352.8	（80.8）
		大学院生	373.6	（12.8）
		教員	106.8	（3.7）
		職員	26.4	（0.9）
		その他	53.1	（1.8）
		（小計）	2,912.7	（100.0）
	（洋図書）	学部生	17.8	（19.2）
		大学院生	51.1	（55.2）
		教員	18.8	（20.3）
		職員	1.0	（1.1）
		その他	3.9	（4.2）
		（小計）	92.6	（100.0）
（合　計）			3,005.2	
教　員	（和図書）	学部生	24.6	（29.9）
		大学院生	11.0	（13.4）
		教員	42.7	（52.0）
		職員	0.4	（0.5）
		その他	3.3	（4.1）
		（小計）	82.0	（100.0）
	（洋図書）	学部生	19.6	（14.0）
		大学院生	54.0	（38.7）
		教員	55.9	（40.0）
		職員	4.8	（3.4）
		その他	5.3	（3.8）
		（小計）	139.6	（100.0）
（合　計）			221.6	

※貸出数：受入年と同年に貸し出された件数

また，蔵書回転率は，貸出回数を蔵書数で除しているために，人数の多い集団の値が高くなる傾向にあった。このような利用者別蔵書回転率の特



第 3 図　利用者別蔵書回転率の比較（和図書）



第 4 図　利用者別蔵書回転率の比較（洋図書）

性から考えれば，学部生の蔵書回転率の値が他の利用者グループよりも高くなることが予想される。しかし，洋図書に関する学部生の蔵書回転率の値が，人数が少ない大学院生の値よりも低いことは，本研究における特徴的な結果である。

7.　オブソレッセンス

1999 年に受け入れられた図書のうち，図書館員が選書した和図書の利用は 2000 年以降，大きく減少していた。ただし，図書館員が選書した洋図書，教員が選書した和図書と洋図書については，受入当初より利用があまりないために，比較をするのが難しい。注目に値するのは，1999 年に受入をした図書のうち図書館員が選書した和図書は，（1）2007 年においても 1.00 以上の蔵書回転率を維持し，（2）和図書と洋図書ともに，図書館員が選書した図書のほうが，教員が選書した図書よりも継続的に高い値を示していることである。つまり，図書館員が選書した図書のほうが，継続的に利用されていることが実証的に示された（第 5 図）。

2000 年に受け入れた図書のオブソレッセンスの確認も行なったが，1999 年に受け入れられた図書と同様の傾向を示していた。

B.　チェックリスト法

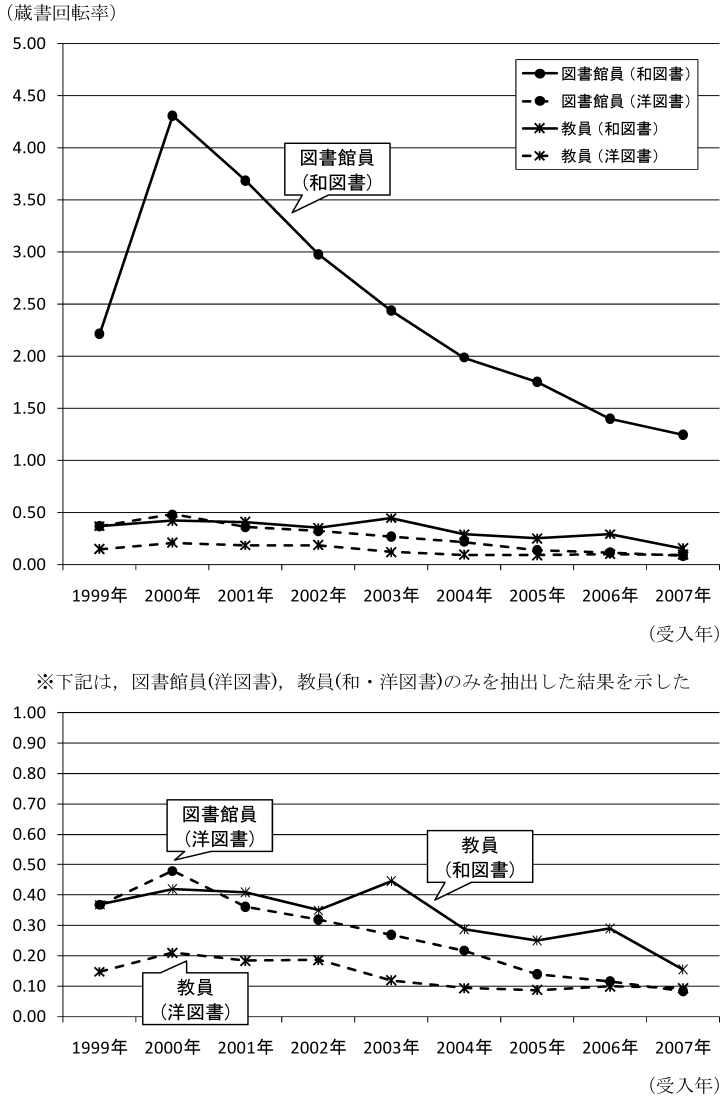
チェックリスト法による結果を示す（第 7 表）。チェックリスト法については，和図書（2004 年と 2005 年）のみを分析の対象とした。

教員のチェックリストとの重複率は 13.6％であり，図書館員が選書した図書の重複率（80.2％）と比較すると低かった。ここから，蔵書中心評価法においても，教員の選書の評価は，図書館員に比べ低いことがわかった。

IV.　考察と結論

A.　図書館員と教員の選書の比較

慶應義塾大学三田メディアセンターを対象に，実証的な蔵書評価法を用いることで明らかになった図書館員と教員の選書の特徴を示す（第 8 表）。「利用統計分析法」では，主として利用者の観点から蔵書を評価することで，図書館員と教員の選書の特徴を明らかにした。まず第一に，図書館員は和図書を多く選書し，教員は洋図書を多く選書する傾向にあった。第二は，図書館員が選書した和図書は多く貸し出される傾向にあるのに対し，それ以外は，あまり貸し出されていなかっ



第５図　オブソレッセンスの比較（1999 年受入図書）

第７表　チェックリストとの重複率（2004 年と 2005 年の合算）

	総　数（件）	重複数（件）	重複率（％）
チェックリスト	5,979	5,979	100.0
図書館員の選書（和図書）	2,693	2,159	80.2
教員の選書（和図書）	487	66	13.6

た。特に，教員が選書した図書は，その多くが貸し出されていないことは特徴的であった。第三は，図書館員が選書した図書は，教員の選書した図書に比べ繰り返し貸し出される傾向にあることであった。第四は，図書館員が選書した図書のほうが，利用者の種類を問わず，かつ長期にわたり数多く借り続けられる傾向にあった。つまり，利用者中心評価法による評価結果からは，教員が選

第8表　図書館員と教員の選書の特徴

	図書館員		教　員	
受入図書（合計）の比率	8.0:2.0（和図書:洋図書）		1.6:8.4（和図書:洋図書）	
	和図書	洋図書	和図書	洋図書
主な利用者	学部生	大学院生	教員	教員，大学院生
貸出頻度	多い	少ない	少ない	少ない
非貸出図書	少ない	多い	多い	多い
図書の寿命	長く利用されるものが多い	長く利用されるものが少ない	長く利用されるものが少ない	長く利用されるものが少ない
チェックリストとの重複	多い	—	少ない	—

書した図書よりも図書館員が選書した図書のほうが，満遍なく，繰り返し貸し出される傾向にあることがいえる。特に，図書館員が選書した和図書は，学部生に繰り返し貸し出される傾向にある。第五は，オブソレッセンスなどからもわかるように，図書館員が選書した図書のほうが，長期的に利用され続ける傾向にあることであった。

もう一方の蔵書評価法である「チェックリスト法」では，「チェックリストとの重複率」をみることで，図書館員と教員の選書を明らかにした。チェックリスト法を用いることで，利用という視点のみならず，複数の視点を導入することが可能になり，多角的な視点から蔵書を評価することを試みた。その結果，チェックリストとの重複率は，図書館員の選書では80.2%となり，教員に比べて格段に高いことがわかった。ここから，図書館員が選書した図書は，さまざまな観点から作成したチェックリストと重複して選書をする確率が，教員よりも高い傾向にあるということがわかった。

本研究の結果が，図書館員は和図書を選書し，教員は洋図書を選書していることを示していることから，定量的な観点からみた場合に，選書における図書館員と教員のすみ分けができていることが明らかになった。ただし，洋図書については，図書館員が選書したものも，教員が選書したものも共に貸出があまり行なわれていなかった。利用者の多くは日本人である以上，和図書の利用が多いのは容易に想像ができるが，洋図書の貸出回数は和図書に比べると少なすぎるように思われる。授業のカリキュラムや授業内容の問題なども考えられるが，購入したにもかかわらず，ほとんど利用されていない状況は，図書館員と教員の選書における共通の課題であるといえる。

B.　図書館員の選書の特徴

本研究で明らかになった図書館員の選書の特徴は，以下のとおりである。

(1) 図書館員は，和図書を多く選ぶ傾向にあった。
(2) 図書館員が選書した和図書は学部生に借りられ，洋図書は大学院生に借りられる傾向にあった。
(3) 図書館員が選書した和図書は，貸し出される頻度が高かった。その一方で，洋図書は，その頻度が低かった。
(4) 図書館員が選書した和図書の大部分が一度は借りられていたが，洋図書の多くは一度も借りられていなかった。
(5) 図書館員が選書した和図書は，時間が経過しても継続的に貸し出されているものが多かった。その一方で，洋図書は時間が経過してもほとんど貸し出されていなかった。
(6) 図書館員が選書した和図書は，チェックリストに含まれる図書との重複率が高かった。

C.　教員の選書の特徴

本研究で明らかになった教員の選書の特徴は，

以下のとおりである。

(1) 教員は，洋図書を多く選書する傾向にあった。
(2) 教員が選書した和図書は教員に借りられ，洋図書は教員と大学院生に借りられる傾向にあった。
(3) 教員が選書した図書は，全般的に貸し出される頻度が低かった。
(4) 教員が選書した図書は，和図書も洋図書も一度も借りられていない割合が高かった。
(5) 教員が選書した図書は，図書館員が選書した図書と比べると，時間が経過しても継続的に貸し出されているものが少なかった。
(6) 教員が選書した和図書は，チェックリストに含まれる図書との重複率が低かった。

D.　選書の分析に用いる蔵書評価法の有効性

本研究は，「利用統計分析法」と「チェックリスト法」という二つの蔵書評価法を用いることで，図書館員と教員の選書を実証的に明らかにした。利用統計分析法では，複数の定量的な方法から図書館員と教員の選書の特徴が明らかになった。また，チェックリスト法では，多様な視点に基づいて作られたチェックリストから図書館員と教員の選書の特徴が明らかになった。

これらのことを考慮すれば，本研究は，Evans や Pritchard が実施した貸出回数・有無のみならず，複数の蔵書評価法を用いて定量的かつ多様な視点から分析することで，これまで定性的な観点からのみ指摘されてきた選書者の特徴を明確に示すことに成功したといえる。ここから，利用統計分析法とチェックリスト法は，蔵書を介した選書者の特徴を実証的に明らかにする際に有効な手法であるといえる。

E.　今後の課題

本研究では，定量的かつ多様な観点から，選書者が図書館員と教員であることによって蔵書構築や図書の利用にどのような影響があるのかを実証的に明らかにすることが重要であった。複数の蔵書評価法を適用することを通して，図書館員と教員の選書の特徴が多角的な観点から明らかになり，それと同時に，本研究が採用した手法は選書者の特徴を実証的に明らかにする際に有効であることもわかった。

しかし，定量的な観点からの研究では，明らかにできなかった点もある。それは，図書館員と教員の選書方針の特徴や具体的な選書のプロセスなどである。本研究に残された課題は，図書館員と教員の選書方針や選書のプロセスはどのようになっているのか，という観点から質的に選書の実態を明らかにすることである。今後，定量的な研究とともに，これらの領域についての研究を進めていきたい。

謝　辞

本研究は，三田図書館・情報学会の研究助成（2007 年度）に基づいて，実施した。本研究の実施・論文作成に際し，ご協力いただいた慶應義塾大学三田メディアセンターの石黒敦子氏，関秀行氏，五十嵐由美子氏，また，ご指導をいただいた慶應義塾大学文学部の上田修一教授と査読者の方々に篤く御礼申し上げます。

注・引用文献

1) 岸田和明．“第 1 章　蔵書評価とその方法”．蔵書評価に関する調査研究．国立国会図書館，2006, p. 5–13.
2) 三浦逸雄，根本彰．コレクションの形成と管理．雄山閣出版，1993, 271p.（講座図書館の理論と実際，第 2 巻）.
3) 河井弘志．蔵書構成と図書選択．日本図書館協会，1992, 283p.（図書館員選書，4）.
4) Carnovsky, L. “The evaluation of public-library facilities”. Library trends: papers presented before the library institute at the University of Chicago, August 3–15, 1936. University of Chicago Press, 1937, p. 286–309.
5) Carnovsky, L.; Martin, L. The library in the community. University of Chicago Press, 1943, 238p.
6) 河井弘志．アメリカにおける図書選択論の学説史的研究．日本図書館協会，1987, 483p.
7) Evans, G. E.; Saponaro, M. Developing library and information center collections. 5th ed, Libraries Unlimited, 2005, 446p.（Library and information science text series）.

8）金子量重編．情報の収集と選択．雄山閣出版，1984, 238p.（講座情報と図書館，第3巻）．
9）Broadus, R. N. Selecting materials for libraries. 2nd ed, H.W. Wilson Co., 1981, 469p.
10）河井弘志．図書選択論の視界．日本図書館協会，2009, 371p.
11）Evans, G. E. Book Selection and Book Collection Usage in Academic Libraries. Library Quarterly. 1970, vol. 40, no. 3, p. 297–308.
12）Pritchard, S. J. Purchase and use of monographs originally requested on interlibrary loan in a medical school library. Library Acquisitions: Practice and Theory. 1980, vol. 4, p. 135–139.
13）日本図書館協会出版流通対策委員会編．全国高等教育機関図書館における資料選択・収書事務・書店＝図書館関係調査結果報告書．日本図書館協会，1981, 343p.（図書館と出版流通，第2集）．
14）慶應義塾大学メディアネット本部編．年次統計資料〈平成19年度〉．MediaNet. 2008, no. 15, p. 85–91.
15）石黒敦子．世紀を越えた知の連環をめざして：慶應義塾図書館の歴史と展望．MediaNet. 2008, no. 15, p. 6–11.
16）梁瀬三千代．“慶應義塾大学三田メディアセンターにおける選書業務について”．パブリック・サービス研究分科会運営委員会編．知識，技能，感性豊かな図書館員を目指して：2002–2003年度パブリック・サービス研究分科会活動報告．私立大学図書館協会東地区部会研究部，2004, p. 51.
17）梁瀬三千代．“人文社会科学系大学図書館の選書について”．パブリック・サービス研究分科会運営委員会編．問い，学び，行動する図書館員を目指して：2004–2005年度パブリック・サービス研究分科会活動報告．私立大学図書館協会東地区部会研究部，2006, p. 42–43.
18）慶應義塾大学三田メディアセンター．2004年度点検・評価報告書，http://www.tenken.keio.ac.jp/pdf/mc.pdf,（入手2009-09-24）．
19）河井弘志．チェックリストによる公共図書館蔵書分析評価法．Library and Information Science. 1971, no. 9, p. 179–207.
20）Carnovsky, L. The St. Paul Public Library and the James Jerome Hill Reference Library: A study of cooperative possibilities. St. Paul Public Library, 1960, 41p.
21）二階健次．都立中央図書館における医学書の蔵書構成について：チェックリスト法による所蔵調査を中心にして．医学図書館．1982, vol. 29, no. 1, p. 36–45.
22）Lotlikar, S. Collection assessment at the Ganser Library: a case study. Collection Building. 1997, vol. 16, no. 1, p. 24–29.
23）粕谷素子．引用参考文献による雑誌の利用と蔵書構成の評価．逐次刊行物研究分科会報告．1999, vol. 55/56, p. 213–217.
24）川村由紀子．地方史誌刊行状況と所蔵状況：蔵書評価を目的とした東京都立中央図書館における蔵書調査．東京都立中央図書館研究紀要．2000, vol. 30, p. 77–98.
25）柴田容子．『雑誌記事索引』を用いた雑誌評価の試み：チェックリスト法及び引用調査法を用いて．資料館紀要．2001, vol. 29, p. 1–24.
26）気谷陽子．博士論文の引用分析を用いた博士課程大学院生の文献利用についての研究：筑波大学の事例．大学図書館研究．2002, vol. 66, p. 33–41.
27）Leiding, R. Using citation checking of undergraduate honors thesis bibliographies to evaluate library collections. College & Research Libraries. 2005, vol. 66, no. 5, p. 417–429.
28）Perrault, A. H. National collecting trends: Collection analysis methods and findings. Library and Information Science Research. 1999, vol. 21, no. 1, p. 47–67.
29）Nisonger, T. Evaluation of library collections, access, and electronic resources : a literature guide and annotated bibliography. Libraries Unlimited, 2003, 316p.
30）National Library of Australia. Australian library collection assessment reports 1988–2009. http://www.nla.gov.au/libraries/resource/car.html,（accessed 2009-07-05）.
31）Bushing, M. C.; Bozeman, M. Final report on initial conspectus project of the National Library of the Czech Republic. 2003, 21p. http://jib-info.cuni.cz/konspekt/dokumenty/final_report_november1.pdf,（accessed 2009-07-05）.
32）Faries, C. Collection evaluation in women's studies: One model for learning the process. Collection Building. 1994, vol. 13, no. 4, p. 1–7.
33）岸田和明，逸村裕，高山正也．大学図書館における館外貸出データの分析手法：オブソレッセンスと貸出頻度分布の分析を中心として．1994, vol. 31, no. 3, p. 79–127.（図書館研究シリーズ）．
34）前野幸治．行橋図書館の現在：蔵書と利用の評価．図書館学．1999, vol. 74, no. 3, p. 6–13.
35）山田周二．館外貸出データに見る利用傾向：蔵書回転率の分析．大学図書館研究．2003, vol. 69, no. 12, p. 27–33.
36）Maughan, P. D. Library resources and services: A cross-disciplinary survey of faculty and graduate student use and satisfaction. Journal of Academic Librarianship. 1999, vol. 25, no. 5, p. 354–366.
37）岸田和明．特集，図書館の評価：利用統計を用いた蔵書評価の手法．情報の科学と技術．1994, vol. 44, no. 6, p. 300–305.
38）東京大学総合図書館；東京大学大学院教育学研究

科図書館情報学研究室．東京大学総合図書館蔵書評価報告書．2001, 169p.
39）野村浩康ほか著．科学研究費補助金からみる全国大学総合ランキング．彗文社，2005, 131p.（科学研究費調査研究シリーズ，No. 1）．

要　　旨

【目的】本研究の目的は，第一に，これまで定性的に述べられてきた大学図書館における図書館員と教員の選書が，利用者の貸出や蔵書構築にどのような影響を与えているのかを定量的に明らかにすることである。第二は，蔵書の状況や利用者の貸出の状況を定量的に分析することで，図書館員と教員の選書の特徴を明らかにすることである。第三は，複数の蔵書評価法を選書研究に適用することで，その有効性を探ることである。

【方法】定量的な蔵書評価法である利用統計分析法とチェックリスト法を採用し，慶應義塾大学三田メディアセンターの経済学分野の図書を対象に，図書館員と教員の選書を比較した。利用統計分析法では，1）蔵書受入冊数，2）蔵書回転率，3）非貸出図書の所蔵率，4）年5回以上貸出のある図書の割合，5）利用者別の貸出率，6）利用者別の蔵書回転率，7）オブソレッセンスという七つの観点から分析を行なった。また，チェックリスト法では，1）他大学図書館の目録，2）経済学分野で書評された図書，3）『選定図書総目録』，4）修士・博士論文の引用文献という四つの観点からチェックリストを作成し，分析を行なった。

【結果】図書館員と教員の選書には，明らかな特徴の違いがあった。利用統計分析法から，図書館員は和図書を多く選書し，教員は図書館員に比べると洋図書を多く選書していた。図書館員が選書した和図書は多く貸し出され，教員が選書した図書はその多くが貸し出されていなかった。図書館員が選書した図書は，利用者の種類を問わず，繰り返し貸し出されていた。また，図書館員が選書した図書は，長期にわたり貸し出される傾向にあった。チェックリスト法からは，図書館員の選書は教員に比べて，チェックリストとの重複率が格段に高いことがわかった。複数の蔵書評価法を適用することで，選書者の特徴を実証的に提示できたことから，蔵書評価法は選書研究に有効な手法であることが明らかになった。